

世界に発信する アーティストたち

No.4

金丸悠児

Yuji KANAMARU



親しみやすいモチーフの奥には多層構造の無意識の世界が広がる
金丸作品は、「記憶の断片」を辿るような心の旅にいざなう。

画家として作家活動をスタートさせて15年の歳月を数えた金丸悠児。現在、国内でもっとも展覧会への出品依頼が多い作家の一人といえるだろう。動物や街並み、サボテンなどのさまざまなモチーフのシリーズ作品があるが、どの作品を見ても独自の重厚なマチエールと絵肌で、金丸作品だとすぐに判別できる。この重厚な絵肌の中に、人間探求の深い思いが隠されているのだが、そのコンセプトが自然と作品に個性的なマチエールを与えている。



「陸の唄」100F

作品をより多くの人に知ってもらうことが、僕の中でより重要だと思っています

断片に繋がって、深層心理のように、無意識に働きかけるような作品にしていきたいなああと考えています。もちろんファーストインプレッションで、可愛いなとか、面白いなあと思っていただくのが大前提なんですけど、じっくり対面していただく中で、

自分の過去の記憶と、無意識が結びついて、より深い所まで浸透していければうれしいなと思っています。

——実際の反応を確かめに、台北には行ってみたいですか。
金丸 行きたいですね。現地の空気とか、どういう人が見に来

——11月のアートフェア「台北」に100号の大作を出品するそうですね。

金丸 台湾で規模が一番大きい歴史のあるアートフェアですから、そこに大作を出していただけるので期待しています。結果がでるまでは何とも言えませんが、自分の作品を評価していただいて、作品を発表させたいと思ってくださる方に巡り会えたら、そのチャンスを活かして前向きに積極的にやっていきたいという気持ちはありますね。

——アジアという地域には特別な思いはあるんですか。

金丸 周りの若いアーティストたちを見てみると、今はアジア全体が一つのエリアという印象をもっていますね。やはり何年か前までのように特別なものではなくて、普通の人じゃないかなと思います。僕自身も、アジア全体をエリアのように意識をしていた方がいいのかと思っています。

——出品作品は、台湾を意識して描きましたか。

金丸 特別な対象はまだありません。今、インターネットなどを使えば情報がすごく開かれています。開かれていますか。その情報を辿っていくと、例えば、その国のトレンドとしてどういったものが発表されているのかというのが見えてくるんですけど、多分それは、すごくメジャーな現場だと思えますね。どういふ場所です。自分が勝負できるのかというところは、実際に自分で見ないと分からないでしょうね。これは自分がどの国でやりたいのかという前の段階なんですけど、自分の作品でどういう面白いことができるのか、どこで自分の作品が評価されるのかというところを知りたいなという気持ちがあるんですけど、

金丸 特別な対象はまだありません。今、インターネットなどを使えば情報がすごく開かれています。開かれていますか。その情報を辿っていくと、例えば、その国のトレンドとしてどういったものが発表されているのかというのが見えてくるんですけど、多分それは、すごくメジャーな現場だと思えますね。どういふ場所です。自分が勝負できるのかというところは、実際に自分で見ないと分からないでしょうね。これは自分がどの国でやりたいのかという前の段階なんですけど、自分の作品でどういう面白いことができるのか、どこで自分の作品が評価されるのかというところを知りたいなという気持ちがあるんですけど、

金丸 まだ新参者ですので、現地で認められているようなアーティストを考えて制作をするというスタンスではなく、まず自分の表現を見てもらって、という感じですね。

——どんな作品を出品するんですか。

金丸 今回特に動物を描いています。日頃から動物を描いている理由といいますか、コンセプトとしては、動物の見える外見をそのまま描くのではなく、内面性とか、動物の肉体的な表情とか、それをずっと継続して表現しているつもりなんですけど。出品作に関しては、例えば、コラーージュを多用しているんですけど、麻布とか英字新聞にランダムにいろいろなモノを描いています。タツノオトシゴがいたり、ここに樹木があったり、傘があったり、気球があったり、ウツボがいたりとか、それら自体に脈絡があるわけではないんですけど、「記憶の断片」として画面全体に散りばめられていて、観る人の無意識の部分の記憶の

ですね。だから具体的にどの国というのはまだないですね。

——現在、国内の展覧会のスケジュールだけでも、相当お忙しい状態なのですが、海外への展開というのやはり真剣に考えていますか。

金丸 持っていきたいという気持ちはありますね。しかし今本当に日本の中で発表させてもらっているのが、それだけでも恵まれていると思うんですけど、やはり、展開としては広いエリアを持ちたいです。これは、僕のプライベートなことですけど、生まれたばかりの頃はイラン、小学生の頃は3年半ニューヨークに住んでいました。幼少期を海外で過ごした時期が多かったというのか、その経験があったせいなのか、海外に対する特別感というのがないような気がしています。なので、自分の活躍できる場があればどこでも行きますし、最善を尽くす気ですが、ことさら海外だという気持ちではなく、自然体で広がっていくのじゃないかと



「空の居住区」30F

略歴

- 1978年 神奈川県生まれ
- 2001年 東京藝術大学デザイン科卒業
- 2002年 アーティスト集団 C-DEPOT を設立、代表を務める
- 2003年 東京藝術大学大学院 (大藪雅孝研究室) 修了
EXHIBITION C-DEPOT 2003 (以降毎年)
- 2004年 平成 16 年度新生展 < 新生賞 >
- 2005年 損保ジャパン美術財団選抜奨励展
- 2006年 韓国青年ビエンナーレ / 大邱文化芸術会館 (韓国)
- 2007年 ShinPA! / おぶせミュージアム・中島千波館 (以降毎年)
ShinPA 東京展 / 佐藤美術館 (以降毎年)
TCAF 2007 / 東美アートフォーラム (以降 '09)
- 2010年 C-DEPOT 2010 旅 / Shun Art Gallery (上海)
- 2011年 アートフェア東京 2011 / 東京国際フォーラム
- 2012年 新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館 金丸悠児展
- その他 個展、グループ展など多数

● ART TAIPEI 2012
<http://www.art-taipei.com/>
 11月9日～12日

※同シリーズは月刊ギャラリーのHPに英語版を紹介しています。



「カサナルイノチ」1303 × 450mm

思います。

——つまり、「世界に発信するアーティストたち」というような、このシリーズタイトルのような「世界だ」という特別感無く、冷静に日本以外の発表の場を広げていこうという捉え方ですね。

金丸 いわゆる憧れで海外旅行にいくというのがないですね。でも機会があれば冷静に頑張るといように思っています。

——どんな作家になっていこうというビジョンはありますか。

金丸 作家・金丸悠児としては

ど中島先生が退官されますが、本当に多くのことを学ばせていただきました。

——どんなことを学んだのですか。

金丸 視覚的にまず分かるということ。もちろん自分なりのコンセプトがどんな作家にもあるわけで、そのコンセプトを添えることで理解が深まるというプロセスがあることを学んだのが大きいと思います。それよりも先ほども言いましたが二大巨匠

本当に絵を描いて、より多くの人に知ってもらうことが僕の中でより重要だと思っています。知ってもらおうということは、作品を見てもらうて知ってもらって有名になって、メジャーになって、ということだと思っていますね。今の自分が考え得る表現スタイルと、応援してくださる方や、一緒に仕事している方々とさらに展開を大きくしていくことだと思っています。

——これまで、本当に順調に作家としての活動を続けてこられましたよね。

の先生の背中を間近で見られたことが大きかったですね。それと同じ卒業生で共通して活躍しているのは、継続しつづつと描き続けている人です。そういう環境から途切れずに制作を続けることが大切だというのが肝に銘じています。

——継続は大切ですが、現在のようないろんな状況でも、創作意欲は途切れないものなんですか。

金丸 やはり機会をいただいで、

どんな描ける環境をもらっている限りは、多分、僕は筆は止まらないんじゃないかと思えます。

——次の作品のアイデアはどのように浮かんでくるんですか。

金丸 フツと瞬間に降りてくることがありますね。何となくアンテナは張っているんですけど、意識的に次どうしようと考えている間は、まだ視野や思考範囲が狭くて駄目なんですけど、

ださった方も随分増えてきたよな気がします。そういう方たちのためにも、きちんと応えていかないといけない時期にきていると思っています。それはいい絵を描き続けることもそうなんですけど、作家として人間とし

てステップアップしていくことが大切だと意識しています。

——ここまで継続して評価され続けてきたということを、自身ではどのように思いますか。

金丸 分かりますが、大きいのは自分の出身が東京藝術大学のデザイン科描画研究室で、大藪雅孝先生がいて、中島千波先生がいてという中で大きな恩恵を得たことでしょう。周りがその教え子ということで期待してくれたことで、すごくいいスタートが切れた。今年はずい

無意識にシャワーを浴びている瞬間に、ああこういうものいいかな、という感じに降りてくる。というのがありますね。

——そういう形でこれまで作品が誕生してきているわけですね。これからも、より広いエリアに向かって、どんどん良い作品を発表してください。今は、台北の結果がまずどうなるか、気になるそうですね。お忙しい所ありがとうございます。